

## 解題

## 老圃詩膜

## 一卷

安積 積 覺著

安積覺、字は子先、覺兵衛と稱す、澹泊と號す、又た老圃と號す、祖父正、信、元和乙卯、大坂の役に戦功あり、後ち水戸侯に仕ふ、父貞吉、繼でその祿を食む、澹泊生れて十歳にして朱舜水を師とし、長ずるに及び、博學能文にして、最も史に長ぜり、義公が大日本史を編するに及びて、澹泊は之が總裁と爲れり、元文二年、病を以て歿す、年八十二、明治三十五年十一月、正四位を贈らる。

此書は湖亭涉筆第四卷にありて、本邦詩人の逸話を録し、唐宋詩家の佳話逸聞を記し、或は詩句の妙を論じ、瑕疵を論ずる等、頗蘊蓄を傾注せり、膜は唐韻に、戸皆反とあり、説文を按ずるに、膜、肺也といへり、詩膜とは、蓋其の話する所、枯瘦にして生肉の味なしと謙遜したるならん。

## 老圃詩腴

涉筆草罷、偶看劉靜修讀史評詩云、記錄紛紛已失眞、語言輕重在詞臣、若將字字論心術、便有無邊受屈人、乃驪然自笑曰、老圃頗涉書史、亦非冥頑不靈者、不以澆染藝術之餘、反求諸己、自攻其短、而敢弄唇吻、輕議古人、不亦悖乎、其志本在欲備遺忘、而其迹不免僭踰之責、因輟而不爲、竹爐湯沸、茗芽一啜、便覺芳潤逼脾、忽憶平生與客談詩、粗有所得、無益之甚、不足哀冀、而習氣未除、實礙于此、以資濯畦之

老圃詩腴

澹泊齋 安積 覺著

涉筆草し罷み、偶、劉靜修の史評を讀む詩を見るに、云「記錄紛々己に眞を失ふ、語言輕重詞臣に在り、若し字々を將て心術を論せば、便ち無邊屈を受ける人有らん」と乃驪然として自ら笑て曰、老圃頗書史に涉る、亦冥頑不靈の者に非ず、染に澆き菊を藝うるの餘を以て、反て諸を己に求めて、自ら其短を攻めずして、敢唇吻を弄して、輕しく古人を議す、亦悖らずや、其志、本と遺忘に備へんと欲するに在り、而して其迹、僭踰の責を免れず、因て輟て爲さず、竹爐湯沸き、茗芽一啜、便ち芳潤脾に逼るを覺ゆ、忽ち憶ふ平生客と詩を談じ、粗、得る所あり、無益の甚しき、冀冀するに足らざれど、而して習氣未だ除かず、此に實礙して、以て濯畦の暇に資す、亦老境の遺忘に備へんと欲するなり。

一

暇亦欲備老境之遺忘也。

懷風藻載大津皇子臨刑詩曰金鳥臨西舍、鼓聲催短命、泉路無賓主、此夕誰家向、當時言詩昉於大友帝、而同時有大津皇子、日本紀稱其自幼好學、博覽屬文、而軌謀不軌、不能充其才、惜哉、石倉詩選曹學倫字龍始、號石倉引明興雜記曰太祖誅藍玉籍其家、凡有雙字往來皆得罪、孫黃牛仲術、號西應、因與玉題一畫、故殺之、其絕命詩曰、鼙鼓三聲急、西山日又斜、黃泉無客舍、今夜宿誰家、詩意悽惻、絕與皇子之詩相似、今按朱鳥元年、皇子賜死、與唐中宗嗣聖三年相值、據獻徵錄、黃死在洪武二十年、嗣聖三年至洪武二十年、相距七百餘年、明人未必見懷風藻、縱見之、未必蹈襲、事

懷風藻に大津皇子の刑に臨む詩を載せて曰、「金鳥西舍に臨み、鼓聲短命を催、泉路賓主無し、此の夕誰家に向はん」と、當時詩を言ふ、大友帝に昉まる、而して同時に大津皇子あり、日本紀に其幼より學を好み、博覽にして文を屬するを稱す、而して軌不軌を謀り、其才を充つる能はず、惜ひかな、石倉詩選に曹學倫字は龍始、石倉と號す、明興雜記を引いて曰く、太祖藍玉を誅し、其家を籍す、凡そ雙字の往來あるもの、皆罪を得たり、孫黃字は仲術、西應と號す、玉が與めに一畫に題するが故に因て之を殺す、其絶命の詩に曰く「鼙鼓三聲急に、西山日又斜なり、黃泉客舍なし、今夜誰家にか宿せん」と、詩意悽惻、絶はだ皇子の詩と相似たり、今按ずるに朱鳥元年、皇子死を賜はる、唐の中宗の嗣聖三年と相値る、獻徵錄に據るに、黃の死するは洪武二十年に在り、嗣聖三年より洪武二十年に至るまで、相距ること七百餘年なり、明人は未だ必しも懷風藻を見ず、縱ひ之を見るも、未だ必しも蹈襲せず、事の偶合、乃ち此の如き者あり。

之偶合、乃有如此者。

扶桑集、大江音人呈渤海裴大使詩、虛聲我類羊公鶴、遠操君同馬爰龍、和裴大使詩、遠排波母青山鶴、近對東王紫龍松、重酬裴大使詩、占雲雖伴荀鳴鶴、摘藻多慙范彥龍、按晉書宋纖傳、馬爰稱纖曰、先生人中之龍、唐類函引聖賢冢墓記曰、東平王歸國思京師、後薨葬東平、其冢上松柏皆西廡、梁雲字彥龍、皆用事精切、雖類崑體、而氣脈深厚、源順五歎吟、年少昔思懷橘志、痛深今戀折蓬恩、婉曲有味、可謂善用事者也。

王維夷門歌、七十老翁何所求、解者引晉段灼追理鄧艾語、是也、宋孝武帝撫慰王玄謨曰、七十老公、反欲何求、君臣之際、足以相保、

扶桑集に、大江の音人、渤海の裴大使に呈する詩、虚聲我は類す羊公の鶴、遠操君は同じ馬爰か龍と、裴大使に和する詩、遠く波母を排す青山の鶴、近く對す東王紫龍の松と、重ねて裴大使に酬ゆる詩に、雲を占て荀鳴鶴に伴ふと雖、藻を摘て多く范彦龍に慙つと、按ずるに晉書宋纖傳に、馬爰、纖を稱して曰く、先生は人中之龍と、唐類函に聖賢冢墓記を引て曰く、東平王國に歸りて京師を思ふ、後ち薨じて東平に葬らる、其の冢上の松柏皆西に靡く、梁の范雲字は彦龍、皆事を用ふる精切たり、崑體に類すと雖、而して氣脈深厚なり、源順の五歎の吟、年少くして昔思ふ懷橘の志、痛深ふして今戀ふ折蓬の恩と、婉曲、味あり、善く事を用ふる者と謂ふ可し。

王維の夷門の歌に、七十の老翁何の求むる所ぞと、解者晉の段灼が追ふて鄧艾を理する語を引く、是なり、宋の孝武帝王玄謨を撫慰して曰く、七十の老公、反つて何をか求めんと欲す、君臣の際、以て相保するに足ると、亦段

亦用段灼語也。

張說三月二十日、承恩樂遊園宴排律中聯云、皇情貸芳月、旬宴美成功、魚戲芙蓉水、鶯啼楊柳風、旬宴皇朝典故、而沿唐制者也。

陳子昂峴山懷古、野樹蒼煙斷、津樓晚氣孤、過荊州、古樹蒼煙斷、虛庭白露寒、二聯偶同、而不妨其高、陳后山登鵲山、朴俗猶虞力、安流尚禹謨、蓋祖子昂白帝懷古、荒服仍周甸、深山尚禹功句也。

初唐詩亦有鍊字琢句極尖巧者、如王勃泥溪排律、溜急船文亂、巖斜騎影移、又云、風生蘋浦葉、露泣竹潭枝、此等語、猶不能脫齊梁綺靡之習、而其雄渾之氣、自然胚胎盛唐諸子、觀其全篇、可知矣。

灼の語を用ふるなり。

張說の三月二十日恩を承け樂遊園に宴する排律の中聯に云ふ、皇情芳月を貸し、旬宴成功美なり、魚は戯る芙蓉の水、鶯は啼く楊柳の風と、旬宴は皇朝の典故にして、唐制に沿へるものなり。

陳子昂の峴山の懷古に「野樹蒼煙斷え、津樓晚氣孤なり」、荊州を過るに「古樹蒼煙斷え、虛庭白露寒し」、二聯偶、同じ、而して其高きを妨げず、陳后山の鵲山に登る、朴俗猶は虞力、安流尚は禹謨と、蓋、子昂の白帝の懷古「荒服仍は周甸、深山尚は禹功」の句を祖とせるなり。

初唐の詩も亦鍊字琢句、極めて尖巧なるものあり、王勃泥溪の排律の如き「溜急にして船文亂れ、巖斜にして騎影移る」、又云、風は生ず蘋浦の葉、露は泣く竹潭の枝、此れ等の語、猶は齊梁綺靡の習を脱する能はず、而して其雄渾の氣、自然に盛唐諸子を胚胎す、其全篇を觀て知るべし。

劉長卿種荷依野水、移柳待山鷺、薛能蘊草因逢藥、移花更得鶯、劉句妙在待字、薛句妙在得字。

通鑑、齊高帝擊沈攸之、劉善明謂高帝曰、今六師齊奮、諸侯同舉、此籠中之鳥耳、杜詩、日月籠中鳥、蓋用此語、而集注、但云、人生奔馳歲月、如籠中之鳥、局促不得自由、姑錄此以備參考。

堯山堂外紀曰、至天隱所注唐三體詩、置長洲磯沙寺、今吳人稱磯沙唐詩是也、余竊疑五言律詩中所載常建泊舟盱眙詩、雖格律平正、而不類常建諸詩、偶閱唐詩紀事、此詩作韋建、而云建與蕭穎士最善、據此則韋建中唐詩人也、三體詩卷首載詩人履歷、有常

劉長卿、荷を種えて野水に依り、柳を移して山鷺を待つ、薛能、草を蘊で因て藥に逢ひ、花を移して更に鶯を得たり、と、劉句の妙は待の字に在り、薛句の妙は得の字に在り。

通鑑に、齊の高帝、沈攸之を撃つ、劉善明、高帝に謂て曰く、今六師齊く奮ひ、諸侯同く舉ぐ、此れ籠中の鳥のみと、杜詩に、日月籠中の鳥と、蓋、此語を用ふ、而して集注に但、人生、歲月に奔馳す、籠中の鳥が局促して自由を得ざるが如しと云ふのみ、姑らく此を録して以て参考に備ふ。

堯山堂外紀に曰く、至天隱注する所の唐三體詩、長洲磯沙寺に置く、今吳人、磯沙唐詩と稱す、是なり、余竊に疑ふ、五言律詩の中に、載する所の常建、舟を盱眙に泊す、詩格律平正と雖、而して常建の諸詩に類せず、偶、唐詩紀事を閱するに、此詩、韋建に作れり、而して云ふ建と蕭穎士と最も善しと、此に據れば則、韋建は中唐の詩人なり、三體詩、卷首に詩人の履歷を載す、常建ありて、韋建なし、常建の二字相近し、乃知る從來誤りて、韋を以て常と爲す、

建無韋建、常韋二字相近、乃知從來誤以韋爲常、而非板刻之訛也、焦弱侯極詆三體詩、唐詩鼓吹所取大抵皆晚唐之最下者、其人無識而寡學、要不足辨、未知果是否。

盧綸、孤村樹色昏、殘雨、遠寺鐘聲帶夕陽、磧沙唐詩收之、固爲警策、喻鳧、樹色含殘雨、河流帶夕陽、唐詩品彙收之、亦不妨其高妙、但考世次、綸爲大曆才子、鳧乃開成進士、恐不免蹈襲耳。

李羣玉送秦煉師、水流寧有意、雲汎本無心、此全摸倣少陵水流心不競、雲在意俱遲、二句、而格力不逮甚遠、此乃盛晚之所由判、歟、老學庵筆記曰、遠相李儼作黃菊賦、獻其主耶律洪基、洪基作詩題其後、以賜之、云、昨日

而して板刻の訛に非るなり、焦弱侯極めて詆る、三體詩、唐詩鼓吹、取所大抵皆晚唐の最下なるもの、其人識なく而して學寡し、要、辨するに足らずと、未だ知らず果して是なりや否や。

盧綸、孤村の樹色殘雨昏く、遠寺の鐘聲夕陽を帶ぶ、磧沙唐詩に之を收む、固より警策たり、喻鳧の、樹色殘雨を含み、河流夕陽を帶ぶ、唐詩品彙にこれを收む、亦其高妙を妨げず、但、世次を考ふるに綸は大曆の才子たり、鳧は乃ち開成の進士なり、恐くは蹈襲を免れざるのみ。

李羣玉の秦煉師を送る、水流れて寧ぞ意有らんや、雲汎んで本無心と、此れ全く少陵の、水流れて心競はず、雲在りて意俱に遲し、の二句を摸倣す、而して格力遠ばざること甚遠し、此れ乃盛晚の由て判るゝ所か。

老學庵筆記に曰、遠の相李儼、黃菊の賦を作りて、其主耶律洪基に獻す、洪基詩を作て其後に題して、以て之を賜ふと云、昨日卿か黃菊の賦を得、金英を碎剪して、填て、句

得卿黃菊賦、碎剪金英、填作句、袖中猶覺有餘香、冷落西風吹不去、今按洪基道宗也、此詩儘有風致、堯山堂外紀曰、僧舊著黑衣、元文宗寵愛笑隱、賜以黃衣、其徒後皆衣黃、歐陽原功玄字題僧墨菊詩曰、蕊蕊元是黑、衣郎當代深仁始、賜黃今日黃花翻潑墨、本來面目見馨香、據此則僧著黃衣、蓋昉于蒲室也。

萬姓統譜、沈莊可、宣和間進士、知錢塘縣事、嗜菊、庭植數十本、晚年退居、益放情于菊、後以九月九日死、朱熹哭之詩曰、愛菊平生不愛錢、此君原是菊花仙、正當地下修文日、恰值人間落帽天、生與唐詩同一脈、死隨陶逕葬千年、如今忍向西郊哭、東野無兒真可憐、

老圃詩展

と作す、袖中猶覺有餘香有るを、冷落たる西風吹き去らず」と、今按ずるに洪基は道宗なり、此詩儘、風致あり、堯山堂外紀に曰く、僧、舊と黑衣を著く、元の文宗、笑隱を寵愛し、賜ふに黃衣を以てす、其徒後皆黃を衣る、歐陽原功玄の僧の墨菊に題する詩に曰く、「蕊蕊元是れ黒衣の郎、當代深仁始めて黃を賜ふ、今日黃花翻りて墨を潑す、本來の面目馨香を見る、此に據け、則僧の黃衣を著くるは、蓋蒲室に昉はじまるなり。

萬姓統譜に、沈莊可は宣和の間の進士なり、知錢塘縣事たり、菊を嗜む、庭に數十本を植う、晚年退居し、益情を菊に放まゝにす、後、九月九日を以て死す、朱熹これを哭する詩に曰く、「菊を愛して平生錢を愛せず、此の君原と是れ菊花の仙、正に地下修文の日に當り、恰も人間落帽の天に値ふ、生て唐詩と一脈を同うし、死して陶逕に隨ふて千年に葬らる、如今西郊に向ふて哭するに忍びんや、東野兒なし眞に憐むべし」と、今、文集を検するに之れな

今檢文集無之、詩亦尖巧、不類文公作、蓋嫁名也、恐其誤、人故錄之。

元謝宗可、走馬燈詩曰、鸞輪擁騎出、炎精飛繞人間不夜城、風鬣追星低有影、霜蹄逐電去無聲、秦軍夜潰咸陽火、吳炬宵馳赤壁兵、卻憶雕鞍年少日、章臺蹈跡月華明、龜山堂外紀爲二

謝宗可詩、陸天錫集載之、爲天錫詩、字亦稍有不同、未知孰是、戴九靈、插秧婦

詩曰、青袂蒙頭作野妝、輕移蓮步水雲鄉、裙翻、蛺蝶隨風舞、手學、蜻蜓點水忙、緊束、暖煙青滿把、細分、春雨綠成行、村歌欲和聲、難調、羞殺、揚鞭馬上郎、走馬燈、插秧婦、皆此間所有、二詩黏皮著骨、雖非極致、而亦可備詠物一體、夜潰二字、蓋本左傳鄭人宵潰語。

明袁凱 字景文、號海叟、白燕詩、世以爲絕唱、柳絮

し、詩も亦尖巧にして、文公の作に類せず、蓋、名を嫁するなり、其の人を誤らんことを恐る、故に之れを録す。

八

元の謝宗可の走馬燈の詩に曰、鸞輪騎を擁して炎精を出づ、飛び繞る人間の不夜城、風鬣、星を追ふて低して影あり、霜蹄、電を逐ふて去つて聲なし、秦軍夜潰ゆ咸陽の火、吳炬宵馳す赤壁の兵、卻て憶ふ雕鞍年少の日、章臺蹈跡す月華の明、龜山堂外紀に謝宗可の詩と爲す、陸天錫集に之れを載せて天錫の詩と爲す、字亦稍有、同からざる有り、未だ知らず孰れか是なるを、戴九靈の插秧婦の詩に曰く、青袂頭に蒙りて野妝を作す、軽く蓮歩を移す、水雲の郷、裙は蛺蝶を翻して風に隨ふて舞ひ、手は蜻蜓を學んで水に點じて忙し、暖煙を緊束して青、把に滿つ、春雨を細分して、綠行を成す、村歌和せんと欲して聲調し難し、羞殺す鞭を揚る馬上の郎と、走馬燈、插秧婦、皆此間に有る所、二詩黏皮著骨、極致に非ずと雖、而も亦詠物の一體に備ふ可し、夜潰二字、蓋、左傳の鄭人宵潰の語に本づく。

明の袁凱字は景文、海の白燕の詩、世以て絶唱と爲す、柳

池塘香入夢、梨花庭院冷侵衣、一聯尤勝然  
 余嘗見元雅瓊字正詠二月梅詩云、梨花院  
 落爲雲妬、柳絮池塘作雪猜、二聯皆剽竊晏  
 元獻句、瓊元人、凱元末明初人、蓋同時而未  
 知孰先孰後、必有一相犯者、然世稱凱爲袁  
 白燕、則凱之詩名著矣、瓊詩全首見堯山堂  
 外紀。

王廷相芳樹詩、芳樹不相惜、與藤相縈繫、歲  
 久藤枝繁、見藤不見樹、愈安期鍾藤謠、鍾藤  
 纏樹枝、樹枯藤作樹、鄰婦媚私郎、歲久翻作  
 私郎婦、二首一意、而安期比况尤深、推而可  
 喻、姦雄之篡奪、蓋能得謠體者也。

唐荆川竹徑詩、面面隔深竹、茅齋在何處、遙  
 聞犬吠聲、試從此路去、余竊謂此全與宋僧

老圃詩照

梨の池塘、香夢に入り、梨花の庭院、冷衣を侵す、の一聯  
 尤も勝る、然れども余嘗て見る、元の雅瓊字正は二月の梅  
 を詠する詩に云、梨花の院落雲と爲て妬し、柳絮の池塘  
 雪と作て猜す、二聯皆晏元獻が句を剽竊す、瓊は元人、凱  
 は元末明初の人、蓋同時にして未だ孰れか先き孰れか後  
 なるを知らず、必一、相犯す者あらん、然れども世に凱を  
 稱して袁白燕と爲す、則凱の詩名著はる、瓊の詩は全首  
 堯山堂外紀に見ゆ。

王廷相の芳樹の詩、芳樹相惜ます、藤と相縈繫す、歳久く  
 して藤枝繁し、藤を見て樹を見ず、と愈安期、鍾藤謠に、鍾  
 藤、樹枝を纏ふ、樹枯れて藤、樹と作る、鄰婦、私郎に媚ぶ、  
 歳久ふして翻て私郎の婦と作る、二首一意、而して安期  
 は比況尤も深し、推して姦雄の篡奪に喩ふべし、蓋能く  
 謠體を得たるものなり。

唐荆川、竹徑の詩、面々深竹を隔つ茅齋、何れの處にか在  
 る、遙に犬の吠ゆる聲を聞く、試に此路より去らん、余竊  
 に謂ふ此れ全く宋の僧惠詮が唯、犬吠の聲を聞いて、又

惠詮唯聞犬吠聲、又入煙蘿去之句、相同、明人不嫌其蹈襲、取而入選、世必有能辨其工拙者也。

高季迪梅花八首、皆高古超絕、可與西湖八詠參看、其第一首結句曰、秦人若解當時種、不引漁郎入洞天、命意甚新、然元劉須溪有漁人入得桃花洞、唯有梅花路未通之句、則落第二義矣、又季迪有梅花詩云、雪滿山中高士臥、月明林下美人來、凡選明詩者、莫不取之、唯鍾伯敬唐詩歸引此一聯云、腐不可言、而明詩歸亦收之、蓋明詩歸非伯敬所選、余嘗辨之矣。

明詩歸、文震孟舟中詠桂花詩、早識廣寒多險徑、悔從碧落占先春、詳味語意、蓋震孟坐

煙蘿に入り去るの句と相同じ、明人其蹈襲を嫌はず、取つて選に入る、世必ず能く其工拙を辨するもの有らん。

高季迪梅花八首、皆高古超絶、西湖八詠と參へ看るべし、其第一首結句に曰、秦人若し當時の種を解せば、漁郎を引いて洞天に入らずと、命意甚だ新なり、然ども元の劉須溪、漁人入り得たり桃花洞、唯有梅花の路未だ通ぜざる有りの句あり、則第二義に落つ、又季迪、梅花の詩あり云ふ、雪滿ちて山中に高士臥し、月明にして林下に美人來ると、凡そ明詩を選ぶもの、これを取らざる莫し、唯、鍾伯敬か唐詩歸、此一聯を引いて云、腐言ふべからずと、而して明詩歸、亦之れを收む、蓋、明詩歸は伯敬の選する所に非ず、余嘗てこれを辯ぜり。

明詩歸、文震孟舟中に桂花を詠する詩、早く廣寒、險徑多きを識らば、悔ゆらくは碧落に従ひて、先春を占むるを」と、詳に語意を味ふに、蓋、震孟、東林の黨に坐し籍を削

東林黨、削籍後所作、醜藉含羞、無限低回、異於曠日張拳者矣。方文庚寅元旦詩、卜肆尙能言孝弟、醫方猶可立君臣、滄桑之感、亦足動人悲思、明季遺聞、書大學士范景文、甲申殉節、而不載其絕筆詩、今錄于此、孤臣空洒淚、天步遂如斯、妖蝕三光暗、心盟九廟知、翠華迷草路、淮水漲煙澌、故國千年恨、忠魂繞玉墀、翠華淮水、言弘光南渡、亦甚凄切矣。

詩歸張居正怨歌行曰、步出上東門、桃李夾路傍、花花自相對、葉葉自相當、野客叢書載、宋于侯董嬌嬌詩、洛陽城東路、桃李生路傍、花花自相對、葉葉自相當、謂襲曹植豔歌行、江陵又襲于侯詩、何剽竊之甚耶。

性靈集、後夜聞佛法僧鳥詩曰、寒林獨坐草

らるゝ後に作る所、醜藉含羞、限なき低回、目を顧らし拳を張るものに異なり、方文、庚寅元旦の詩、卜肆尙は能く孝弟を言ふ、醫方猶ほ君臣を立つべしと、滄桑の感、亦人の悲思を動かすに足る、明季遺聞に、大學士范景文が、甲申節に殉するを誓ふ、而して其絶筆の詩を載せず、今此に錄す、孤臣空く涙を洒ぐ、天步遂に斯の如し、妖蝕三光暗く、心盟九廟知る、翠華草路に迷ひ、淮水煙澌漲る、故國千年の恨、忠魂玉墀を繞ると、翠華淮水は弘光南渡を言ふ、亦甚だ凄切なり。

詩歸に、張居正の怨歌行に曰く、步して上東門を出づれば、桃李路傍を夾む、花々自ら相對し、葉々自ら相當ると、野客叢書に、宋の于侯董嬌嬌の詩を載す、洛陽城東の路、桃李路傍に生ず、花々自ら相對し、葉々自ら相當ると、謂ふ曹植豔歌行を襲ふと、江陵、又、于侯が詩を襲ふ、何ぞ剽竊の甚しきや。

性靈集に、後夜、佛法僧鳥を聞く詩に曰く、寒林に獨坐す、

堂曉、三寶之聲聞、一鳥、一鳥有聲、人有心、心聲雲水俱了了、惺窩先生以爲集中第一、羅山先生謂唐顧況詩、棲霞寺裏子規鳥、口中血出啼不了、山僧後夜初入定、聞似不聞、山月曉、其體相似、韻亦偶同、山背國宇縣醍醐山有佛法僧鳥、見羅山隨筆、按日本紀略、延喜六年八月、右大臣源光修、法華八講、佛法僧鳥來鳴、此外不多見、近世釋元政詩、亦用其韻曰、梵音嘹唳頻迦鳥、如是我聞便明了、翻來奈何舉似人、月入破窻林寺曉、蓋有意效之者、而弘法詩渾厚天成、不可以色相求、元政詩雖相去甚遠、亦脫灑可喜。

客兒家聲風流相、奈此才高抗、憐何、心難難入遠公社、于思誰誦華元歌、登臨屐老風雲

草堂の曉、三寶の聲一鳥に聞ふ、一鳥聲あり人、心あり、心聲雲水俱に了々、惺窩先生以て集中第一と爲す、羅山先生謂ふ唐の顧況の詩に、棲霞寺の裏子規鳥、口中血出で啼き了らず、山僧後夜初めて定に入る、聞て聞かざるに似たり山月の曉と、其體相似たり、韻も亦偶同じ、山背の國、宇縣醍醐山に佛法僧鳥あり、羅山隨筆に見ゆ、按ずるに日本紀畧延喜六年八月、右大臣源光修、法華八講を修す、佛法僧鳥來り鳴く、此の外多く見ず、近世釋の元政の詩も、亦其韻を用ゆ、曰く、梵音嘹唳たり頻迦鳥、如是我聞便ち明了、翻し來りて奈何ぞ人に舉似せん、月は破窻に入る林寺の曉、蓋之れに效ふに意ある者、而して弘法の詩は渾厚天成、色相を以て求むべからず、元政の詩は相去る甚遠しと雖、亦脫灑喜ぶべし。

客兒の家聲風流の相、此の才高くして、醜憐なるを奈何ん、心難りては入り難し遠公の耻、于思誰か誦す華元が歌、登臨屐老ひて風雲變じ、翻譯蓋荒れて草樹多く、千古

變、翻譯喜荒草樹多、千古使人仰高致、長髯乞與病維摩、右會稽沙門稽文會題謝靈運像、藏在和州山邊郡多田來迎寺、佐宗淳書見其手筆、爲余誦之、恐其遺落、故錄于此、文會、明初僧、客兒靈運小字也。

東國通鑑載、端午石戰、朝鮮李穡牧隱集有詩曰、年年端午聚群頑、飛石相攻兩陣間、馬市川邊朝已集、僧齋寺北暮初還、忽然被逐、輕如葉、屹爾當衝重、似山、只爲朝廷求勇士、殘傷面目亦胡顏、昔時此方俗習、亦與韓地無異、兒戲之害於事者也、寬永中、下令禁之、按唐王式討裘甫、通鑑考異引平剗錄曰、諸軍圍賊於剗、賊悍甚、其所謂女軍者、亦乘城摘礮、久中人、此真石戰者也。

老國時脈

人をして高致を仰がしむ、長髯之與、す病維摩」と、右會稽の沙門稽文會、謝靈運が像に題す、藏して和州山邊郡多田の來迎寺に在り、佐宗淳嘗て其手筆を見て、余が爲に之れを誦す、遺落せんを恐る、故に此に錄す、文會は明初の僧、客兒は靈運の小字なり。

東國通鑑に、端午の石戰を載す、朝鮮の李穡牧隱集に詩あり曰、「年年端午群頑を聚む、石を飛ばして相攻む兩陣の間、馬市川邊朝已に集り、僧齋寺北暮に初めて還る、忽然逐はれて葉よりも軽く、屹爾衝に當りて山よりも重し、只、朝廷勇士を求むるが爲に、面目を殘傷す亦胡の顔ぞ」と、昔時此方の俗習、亦韓地と異なる無し、兒戲の事に害あるものなり、寬永中に令を下して之れを禁ず、按ずるに唐の王式、裘甫を討す、通鑑考異に平剗錄を引て曰く、諸軍賊を剗に圍む、賊悍甚し、其謂はゆる女軍といふもの亦城に乘じ礮を摘て以て人に中つと、此れ眞に石戰するものなり。

朱子語類曰、先生偶誦寒山數詩、其一曰、城

中蛾眉女、珠佩何

本集作珂

珊瑚、鸚鵡花間弄、琵琶月下彈、長歌三日響、短舞萬人看、未必長

如此、芙蓉不奈寒、云如此類、煞有好處、詩人

未易到此、王應麟曰、寒山子、楚辭、尤超出筆

墨畦逕、云有人兮山陘、雲卷兮霞纓、乘芳兮

欲寄、路漫兮難征、心惆悵兮狐疑、蹇獨立兮

忠貞、觀之則非特妙於詩、楚辭亦有得於自

然者歟。

然者歟。

劉須溪曰、晉人語言、使壹用爲詩、皆當掩出

古今、善它真故也、此從漸近自然語中看出、

善論詩者也、然真者不可著力爲之、老練之

極、自然化爲真耳、蓋初盛之詩、情景皆真、如

蘭陵王長恭之臨陣、婉麗、抗壯、其鋒自不可

朱子語類に曰く、先生偶、寒山の數詩を誦す、其一に曰く、  
城中蛾眉の女、珠佩何本集、珂珊瑚々たる、鸚鵡花間に弄  
じ、琵琶月下に彈ず、長歌三日響き、短舞萬人看る、未必必  
しも此の如くならず、芙蓉寒に奈へず、と、云ふ此の如き

の類、然はだ好處あり、詩人未だ此に到り易からず、王應

麟曰く、寒山子の楚辭、尤、筆墨の畦逕を超出す、云ふ、人

あり山陘雲卷霞纓、芳を乘りて寄せんと欲す、路漫とし

て征き難し、心惆悵して狐疑す、蹇獨立して忠貞と、これ

を觀れば、則特に詩に妙なるのみに非ず、楚辭にも亦自

然に得るものあるか。

劉須溪曰く、晉人の語言、壹はら用ひて詩と爲さしめば、

皆當さに古今に掩出すべし、他の真を善くするが故なり

と、此れ漸く自然に近しの語中より看出だす、善く詩を

論ずるものなり、然れども眞は、力を著けて之をなす可

からず、老練の極、自然に化して眞と爲るのみ、蓋初盛の

詩、情景皆眞、蘭陵王長恭の陣に臨むが如し、婉麗、抗壯、其

の鋒自ら當るべからず、中晚、願況一別二十年、人幾回か

當也、中晚如願況一別二十年、人堪幾回別、  
周賀空將未歸意、說向欲行人、張蠟共看今  
夜月、獨作異鄉人、雖不能及初盛、亦不失其  
真處、元人絕句高處、自逼中晚、如陳剛中老  
母越南垂白髮、病妻燕北倚黃昏、疊烟瘴雨  
交州客、三處相思一夢魂、凄楚溢于言外、可  
謂善它真者也。

陶章柳妙處、已經古人多少品藻、今若拈起、

則何異優孟衣冠、故特舉明人效章者、以見

其流風遺韻、楊基字孟載、號眉庵、有雨中效

章體、寄友四首、皆清麗莊雅、其一寄僧道衍

太子少師廣孝曰、叢林翳重岡、迢遞僧居獨憑軒、一

恨望、春雨藤蘿綠、泉香花落砌、窻暝松圍屋、

憶爾諷經餘、袈裟坐深竹、章詩妙在工拙之

別るゝに堪へん、周賀、空く未だ歸らざる意を將て、説て  
行かんと欲する人に向ふ、張に、共に看る今夜の月、獨、異  
郷の人と作るの如き、初盛に及ぶ能はずと雖、亦其真處  
を失はず、元人の絶句、高處は、自ら中晚に逼る、陳剛中、老  
母越南に白髮を垂れ、病妻燕北に黃昏に倚る、疊烟瘴雨  
交州の客、三處相思ふ一夢魂の如き、凄楚、言外に溢る、它  
の眞を善する者と謂ふ可きなり。

陶章柳の妙處、已に古人多少の品藻を經、今若し拈出せ  
ば、則何ぞ優孟が衣冠に異ならん、故に特に明人の章に  
效ふものを擧げて、以て其流風遺韻を見はす、楊基字は孟載、眉庵、  
初四傑の一、明 雨中に章體に效ふて友に寄する四首あり、  
皆清麗莊雅、其一、僧道衍に寄す太子少師 廣孝曰く、叢林重岡  
を翳し、迢遞、僧居獨、軒に憑て一恨望、春雨藤蘿綠、泉香し  
て花砌に落ち、窻暝して松、屋を圍む、憶ふ諷經の餘、袈裟  
深竹に坐すと、章詩の妙は工拙の外に在り、楊は則姿態  
横出す、針線覓むべし、而して其蕭散閒澹の趣を失はず、  
善く柳下惠を學ぶものと謂ふ可し、余、章に左袒するも

外、楊則姿態橫出、針線可覓、而不失其蕭散  
 閒澹之趣、可謂善學柳下惠者矣、余非左袒  
 於韋者、陶如寒山子詩、非可學而能者、韋集  
 中、亦有過於真率、不可爲法者、柳之妙處、世  
 當有自知之者矣。

のに非ず、陶は寒山子の詩の如し、學んで能くすべきも  
 のに非ず、韋集の中、亦真率に通ぎ、法と爲すべからざる  
 もの有り、柳の妙處は、世當に自ら之れを知るもの有る  
 へし。